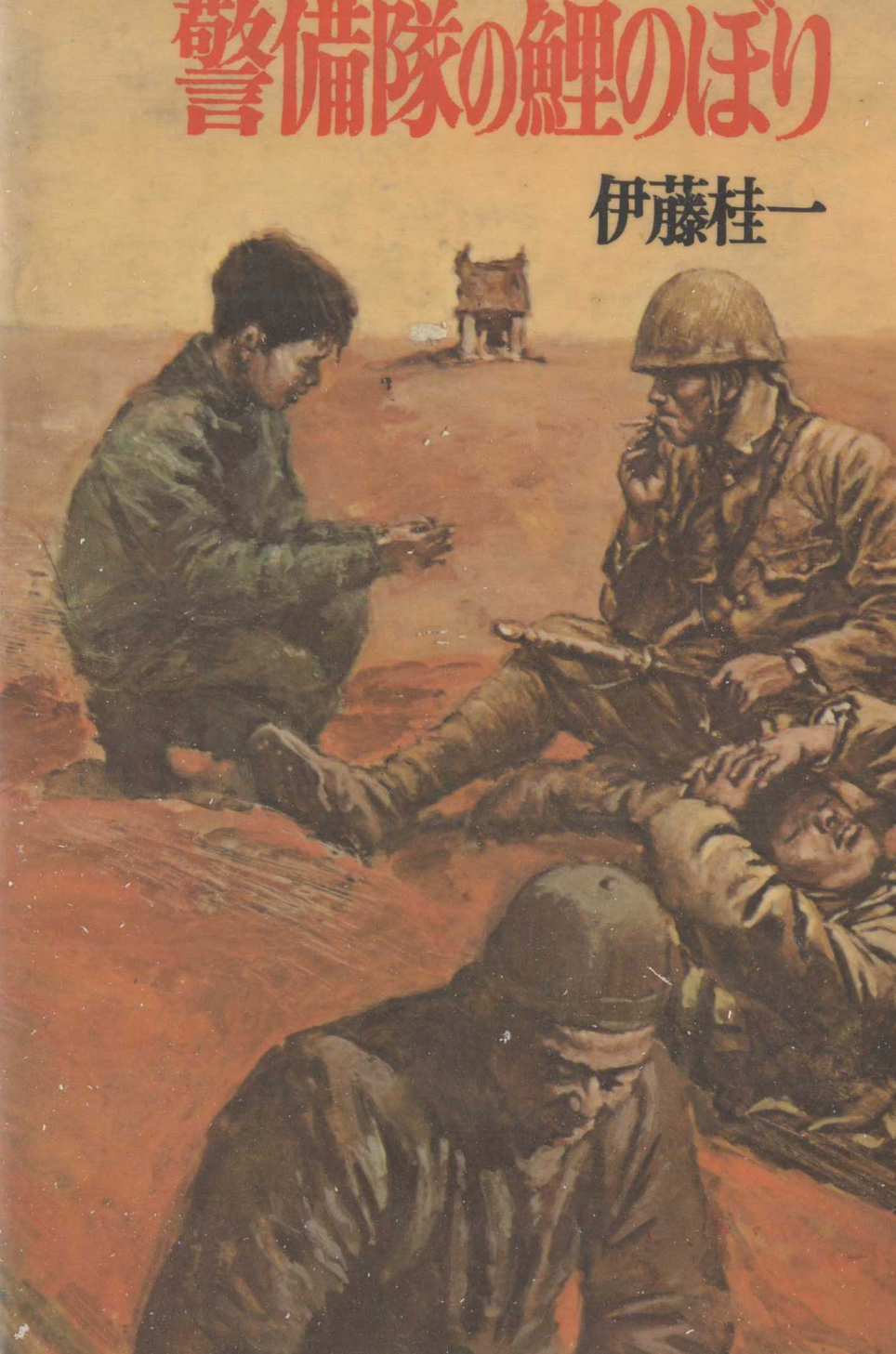
警備隊の鯉のぼり

伊藤桂一



の鯉のぼり

伊藤桂一

光人社刊

警備隊の鯉のぼり

定価 980円

0093-10054-2241

乱丁・落丁のものはおとりかえ致します

印　刷　昭和52年10月15日
第1刷　昭和52年10月27日
著　者　伊藤桂一
発行者　川島　裕
発行所　株式会社光人社
東京都千代田区九段北1-9-11
振替番号・東京7-54693番
電話・東京(03)265-1864～6
本文印刷・慶昌堂印刷株式会社
製本所・小高製本工業株式会社

『警備隊の鯉のぼり』目次

ラバウルの万能軍医……7
警備隊の鯉のぼり……45
小隊長の戦場……79
水のほとり……115
渡河撤退……135
山麓の別れ……155

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

望城倉庫の一太郎……185
胡弓を弾く女……221
分屯地の瓜売り女……241
あとがき……283

カバー・扉絵　依光　隆

警備隊の鯉のぼり

ラバウルの万能軍医

ニューギニアの北方、ニューブリテン島の北端にあるラバウル――は、ニューギニアやソロモン群島への、前進基地であった。

島の突出部は、深く湾曲して、シンプソン湾を抱き込むが、ラバウルの町は、この湾岸にある。風光はいたって明媚。町並は、新旧にわかれるが、どこも色彩の華やかな洋館が多く、南国情緒に満ちていた。しかし、昭和十八年二月に日本軍がガダルカナルから敗退して以来は、ラバウル周辺も、次第に、連合軍のきびしい空襲にさらされ、昭和十九年のはじめには、この町も廃墟と化してしまうのである。

ラバウル周辺には、海軍司令部や陸軍の第八方面軍司令部をはじめ、各守備隊が散在したが、これらの部隊は、空襲の激化とともに、それぞれ、山中に地下陣地を築いて、持久戦の態勢に移っている。ラバウル周辺の地下陣地は、まことに完備していて、掘り進んだ地下壕の延長は、しまいには三百キロにも及んだのである。

連合軍は、昭和十八年末に、島の西方のマーカス岬に上陸するが、日本軍の第十七師団と交戦しつつ、持久戦になった。無理に攻めれば、いたずらに自軍の犠牲も多くなることが、わかっていたからである。このため、戦域は、ラバウルを通り越して、北へ移り、連合軍はやがてサイパ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ン、グアム、テニアンの各島に上陸作戦を行なうのである。

とり残されたラバウルは、敵の、空襲にさらされながらも、しかし、空襲のない場合は、あくまでも澄みわたる蒼天の下で、案外にのどか？　――な生活の場も持てた。もっとも、なによりも食糧には窮していて、各部隊は、それぞれ陣地周辺に農地をひらき、サツマイモやタロイモを栽培して、自活態勢を強化したのだ。

ラバウル駐屯軍約十万は、こうして、敵の上陸軍と決戦する立場に立たされることはなくなったが、その代わり、孤立の苦悩に喘ぐことからは免れ得なかった。地上に安定した生活の場が持てないのだから、衛生上にも悪い。ことに、マラリアの猖獗には、全将兵が悩まされた。しかも、この病気の特効薬であるキニーネは、すでに使い果たされ、患者は放置され、その死亡率も上昇をつづける一方、という状態だったのである。

昭和十八年の十月中旬のある日のことである。野戦高射砲第六十大隊本部付の麻生徹男軍医大尉は、大江一等兵を供にして、ラバウルの町を過ぎ、半島部の突端の東飛行場の近くまで、白陶土をさがしに来ていた。自隊の駐屯しているココポ地区――からは、ここまで約三十キロの行程がある。

「全くよく歩かせやがる。人使いの荒い軍医さんもいるもんだ。おれひとりを眼の敵にしやがって。今にみてろ。おれがおとなしくしてるのは、ヘボ軍医でも、マラリア患者にとっちゃ、何かのおまじないになるだろうと思ってるからだ。――ああ、くたびれた」

飛行場の近くへ来て、やっと大休止になったとき、大江一等兵は、きこえよがしに麻生軍医にそういった。しかし、やることだけはやる。軍医のために弁当（少量の米飯と干魚とサツマイモである）を、肩にかついでいた麻袋の中からとり出し、水筒も添える。（この島では雨水を溜めておいて飲料水とする）。大江は、夜明け前に陣地を出てくる時、麻袋一つをかついできた。弁当のほかに、ここへくる途中で拾ってきた、錆びた銃弾とか、古い工具類とか、鉄線銅線屑針など、軍医は、眼につくものを何でも拾わせて、麻袋に入れさせるのだ。おかげで大江は大黒様のような恰好で、ふくらんだ袋をかついで歩かされることになる。従って不平もいうのだが、麻生軍医のほうは、軍医とはいっても、軍司令部でも一目置いているほどの傑物だから、大江がなにをいおうと、蚊の鳴いたくらいにも感じないのだ。平然として、出された弁当を食い、水を飲み、前面の海景を眺めながら、

「ここらの土を水に溶かして、デカンチーレンして沈渣をとってみても、どうもいい粘土にはならんような気がするなあ」

と、大江には意味のわからないことを、そのくせ大江に話しかけたりしている。麻生軍医の頭の中には、どうやら、白陶土かその代用物のことしかないのだ。ここ半月ほど、朝から晩まで、大江を引っぱり回して、山といわず海岸といわず、歩き回っているのだ。大江がこぼすのも無理はないのである。

この、突出部へ来たのは、東飛行場付近の温泉クリークにある粘土を集めに来たのである。昨日、軍医は、山中のタポ地区のマタネ川沿いのジャングルの中を歩いていて、第三十八師団司令部付の武藤薬剤官に会っている。この人は、ムトウハップという硫黄剤の製作者として知られる

が、軍医とは顔なじみで、その時は、ジャングルの中で茶を点ててご馳走してくれた上、東飛行場付近にはいい粘土があると思う、と示唆してくれたのである。武藤薬剤官は、山中に、硫黄剤をつくる工場まで拵えているのだ。これは皮膚病の薬である。兵隊の皮膚病は水虫とインキンが多い。ことにインキンはひどくて、これを夢中で掻いていると、そばに爆弾が落ちても気がつかない、という冗談さえいわれるほどである。麻生軍医も武藤薬剤官も、ともに長期服務者で、とっくに召集解除の期限も来ているし、交代者も赴任してきているのだが、帰国を控えて戦況悪化し、そのうちに、帰る船も、帰る方法もなくなったので、そのまま、ご奉公がつづいているわけである。

麻生徹男軍医について、もう少々触れておくと、佐賀の産で、昭和十年に九州帝大医学部を出て、昭和十二年十一月から約三年半、軍医として武漢作戦に従事後、ずっと武漢方面にいた。一たん召集解除になったが、昭和十七年初頭に独立野戦高射砲第三十四中隊付として再召集され、同年末にラバウルに出動、その後、大隊本部付になった。ともかく実戦経験ゆたかな筋金入り、ということになる。

しかし、麻生軍医が、いかに筋金入りであっても、筋金だけでは、少なくもマラリア患者は救えなかった。どうしても、特効薬のキニーネが欲しいのである。ラバウルはマラリアのタチが悪く、それも、三日熱と熱帯熱との重感染が多い。こうなると熱型が目茶苦茶になって、診断のめども立たぬうちに、患者はたちまち死亡してしまう、ということになるのだ。高熱悪寒が連続すると、栄養不良で体力が衰えているから、死亡率が高くなるのだ。マラリアというのは、患ってから癒すよりも、患る前の予防が大切である。軍では、マラリアの予防思想を、防瘧思想、とい

うむつかしい呼び方をしていたが、どうすればマラリアを予防できるかに、あれこれと気を遣ったのだ。

第十七師団第五十四連隊所属の増田大尉は、農耕法や漁撈の指導にまで抜群の才があり、名中隊長といわれていたが、この中隊ではマラリア患者が少なかった。なぜ少なかったかというと、大尉は、マラリア患者の状態を研究した結果、患る者はいつもきまっている、それは体力の消耗のせいであり、体力の消耗は兵隊が自瀆をするためである、と判断したのだ。そうして毎朝、自瀆行為をしたかどうかの検査を、することにしたのである。自瀆の常習犯は、性器の頭部が黒くなっているし、前晩自瀆した者は、性器を握ってみれば手ごたえでわかる——と大尉はいったのだ。これで兵隊は、みんなびっくりして、だれも自瀆をつつしむようになったのだ。

麻生軍医は、この噂をきいたとき、増田大尉を訪ねて、実情をきいている。というのは、麻生軍医自身、大隊長に、便所の囲いを取り外せ——と進言していたからである。ドイツの軍隊は便所に囲いをしない、それを真似ろ、といったのである。便所を密室にしてしまうから、よくないのである。増田大尉は、師団では天下御免の権威を持っていたが、麻生軍医も（のちのちくわしく記すが）軍司令部にまでその名を知られた、天下御免の実力がある。それで、会うと、お互いに気が合って、増田大尉は、とっておきの牛罐や、とりたての魚の料理などで軍医を大いに馳走してくれたが、このとき、軍医の質問に、

「チンポを握るとき、兵隊の眼をみとると、やった奴は、キョロキョロしとるから、すぐわかるのじゃよ。しかし、まア、心理的効果を狙っとるのです」

といって苦笑した。いずれにしろ、こういうふうに、中隊長も軍医も、マラリア防遏には、懸

命の苦心をしていたのだ。

大江一等兵が、麻生軍医の当番兵なみにくっつくようになったのも、そのきっかけは、大江がマラリアで苦しんだことにある。この大江というのも、一介の一等兵だが、軍では、天下御免？——の存在だった。というのは、大江は、内地の部隊にいるとき、上官暴行罪で姫路の陸軍刑務所に抛り込まれていたが、部隊の出動に際して、原隊復帰してきたのである。いわゆるムショ帰りの古参兵である。機関銃隊に所属していたが、大江がなにをしても、だれもなにもいわなかった。大隊で、大江に文句をいったのは、麻生軍医だけである。軍医は、輸送船でラバウルへやってくるとき、船中で、兵員に予防注射をしたが、このとき大江が腕に、「一心」と入墨しているのをみて、「なんというケチな入墨をしやがるんだ。こんな奴には、注射を痛くしてやれ」と思いきりぶっつりと針を刺した。かつて軍医が籍を置いた九州兵団の兵隊は、漁師や炭鉱夫や沖仲仕が多かったから、みごとな大入墨をしている者が多かった。それを見つけて来たので、ケちな入墨を笑ったのだが、大江にはやくざの体面があり、人中で恥をかかされたことは、よくよくこたえたのだ。根深い恨みを持ち、ラバウルに上陸すると、

「麻生の奴を、生きては、赤道を越させねえ。ラバウルで生きのびても、帰りは太平洋へ沈めてやる。よく覚えといてくれ」

と、髭面に眼を光らせて、まわりの者たちに宣言している。さすがに大江も、戦場における軍医の価値はわかっているから、手を出すようなことはしなかったが、しばらくして、軍医の宿舎である幕舎のまん前にある椰子の木で、長々と立小便をしたことがある。飛沫が幕舎にかかるほどなのだ。挑戦的行為である。すると、幕舎の中にいた軍医は、とび出してくるなり、まだ小便

をしている途中の大江を突きとばし、
「おれを、そこらの軍医なみに甘くみるなよ。腰の拳銃はダテじゃねえんだ。殺し合いならいつでも相手になってやる」
と、いって睨みすえた。大江は小柄でずんぐりした体軀だが、軍医も別に身体が大きいわけではない。しかし、九州兵の気魄と歴戦の度胸があり、さらに、人間として、どうにもならず大江を威圧するものがある。大江はその場では、喧嘩にのってこなかった。気勢を削がれたのだ。
数日後、その大江が、マラリアの高熱で喘ぎ出したが、軍医には意地にも頼めない。といって頼まねばマラリアが悪化する。弱った大江は、やくざの脆さを露呈して、高熱の儘、
「どうせ軍医はおれなんぞ診ちゃくれねえんだ。さア殺せ、殺しやがれ」
と、わめきながら、ころげまわった。まわりの者は、ほってもおけぬから、軍医のところへ頼みにくる。軍医にしても、頃合をみていたので、頼まれるまでもなく出向いて、解熱剤としては貴重なバグノン液を注射したりして、大江を救ってやっている。しかし大江は、「おれは、頼んだわけじゃねえぞ。軍医が勝手にやったんだ。それが仕事だからな」と、なお強がりをいい張った。それどころか、さらに自分の立場を悪くしたため、軍医を逆恨みする気配さえあった。
そのうちに軍医は、急な命令を受けて、山中にいる部隊へ赴いたので、しばらく大江とも離れた。軍医が山中へ赴いたのは、そこの部隊に、オーム熱——という奇病が大発生したからである。
そこはタポ地区の草原地帯だったが、発生した奇病を、オーム熱と診断したのは、同地区の衛生管理をしている、防空隊司令部の軍医だったが、麻生軍医は、命を得て、タポ地区へ向かうとき、これはオーム熱などではない、恙虫病ではないのか？ ——と、ひそかに予想していた。恙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com